No. 145

ティーブレイク

Tea Break

温故知故

会員　正林　真之

「今は昔」（今ではもう既に昔のこととなってしまったが…）で始まる今昔物語であるが，そのような話が最近一つ。以前の NHK アニメ番組の「未来少年コナン」。その復刻版 DVD を子供らと一緒に見た。

今の子供たちは，コナンといえば名探偵コナンのことを言うようであるが，我々が子供の頃は，コナンといえば未来少年コナンであった。

これを見た今の子供たちが一言。「何で地球は滅んだはずなのに，今こうしてみんなが生きていられるの？！」と。最初は何のことだかさっぱり分からなかったが，どうやら未来少年コナンの最初の説明ナレーションのところのことのようである。

そこでは，核兵器を遥かに超える超磁力兵器が使用された戦争が起こり，人類は一瞬にして滅亡の危機に立たされることになっていた。そして，戦争で使用された超磁力兵器によって引き起こされた大地殻変動により，世界の大半が一瞬にしてなくなり，五大陸が全て海に沈んでしまったのが，何と 2008 年の 7 月という設定であったのだ。

しかしながら，このアニメーションが製作されたのが 1978 年。今から 30 年以上も前である。逆に見ると，当時このアニメは，自分らの 30 年後を想定して作られたことになる。

その当時は，米ソ冷戦で，今にも世界的な核戦争が起こるかのような一種の恐怖感で世界が覆われていた。当時，中学生くらいになれば，ちょっと気の利いた連中は，核兵器が発射されたらどうしようと言っていたことがあったし，「そんなの大丈夫だよ」という気楽な大人も居た傍らでノストラダムスの大予言が流行り，恐怖の大王が天から降りてきて人類は 21 世紀を迎えられないだろうことも，ある程度の信憑性を持って受け止められていた。

ノストラダムスの云う「恐怖の大王」というのは，核兵器のことではないか，と思えば，この話はそれなりの真実味を帯びていたので，実際には，それを信じて子供を作らなかった夫婦も実在したとのことである。

また，その当時では，その二十数年後には石油も枯渇することが指摘されていた。現に，未来少年コナンでも，海底油田を含め，油田は一本もなく，燃料はすべて廃棄プラスティックから再生産されていた。

けれども，未来少年コナンで言われていた滅亡崖っぷちの日である 2008 年 7 月も，ノストラダムスの予言の日も，今はもう昔のものとなってしまった。まさに現代版の今昔物語である。ちなみに，石油もまだ無くなってはいない。

ところで，よくよく考えてみると，今のこの時点で子供たちとコナンを見ている自分らの年齢は，まさに 30 年前のあの当時の自分の親たちの年齢と同じである。ただ，彼らはこのアニメを，もしかしたらこんなことになるかもしれないなという未来のこととして見ていたのに対し，自分らはまさに杞憂に終わった過去の歴史として見ているだけである。

その当時の親たちの心境というのは，どうであったのか。それを推定する作業の難しさというのは，実は，発明の進歩性を判断する際の難しさと似ている。当時の親の状況を，「この子らが大人になったときに世界はどう

なってしまっているのか」と我が子を心配したその当時の親の心境を，結果を知った今の立場から過去を見て「なんて馬鹿なことを心配していたんだ。あほらしい」と思ってしまえば，進歩性も何も，あったものではない。

その当時，季節の変わり目には，母親とともに，クリーニングに出す背広を選り分け，そのポケットから時たま出てくる小銭に歓喜の声を上げていた。それを見ていた母親も，本当に嬉しそうだった。

けれども，学校に持っていく給食費の封筒に，新品を使わず，使用済みの封筒を裏返して使っていた時代である。メモ帳だって新品は使わない。広告の裏を使っていたのである。都会はどうであったかは知らないが，田舎のほうではそうであった。

そんな時代に，あんなにカネに細かかった父親が，ポケットに小銭を残しておくなんて，ありえないことである。

きっと母が，幼い私を喜ばせるために一計を案じてのことだったのであろう。もはや故人となってしまった母にそれを聞くことはできないが，おそらくそうであったことだろう。

そして，何かと貧しかったあの当時ならいざ知らず，モノがあふれた今の状況から判断すれば，そんなアイディアなど進歩性があるとは思えない。そんなことは，分かっている。自分はもう，30年前の子供ではない。それにもう弁理士なのだから。

けれども，それを思い出すたびに心に湧き出てくる暖かい想いは格別の効果であろうし，当時の状況を斟酌すれば，やはりそこには進歩性があったのだと言ってみたい。いや，そんなことすらなかったとしても，世の中には特許や発明にならないものでも，本当に大切な工夫やアイディアがあるのである。

特許制度が進む世の中でも，こうした暖かいアイディアに包まれた世の中にしたいものだ。故きを温めて新しきを知ることが常の発明現場に囲まれている弁理士の日常では，ときには，今はもう昔となってしまった故きを温めて故きを知ることも，大切なことなのであろう。

書籍紹介

単行本：246ページ
出版社：ミネルヴァ書房
（2010/4/30）
言語：日本語
ISBN-10：4623057283
ISBN-13：978-4623057283
発売日：2010/4/30
商品の寸法：21.4×14.8×2.4cm

近年，著作権法の分野では数多くの解説書が発行されており，書名に「概説」の名を含むものも本書だけではない。

しかしながら，本書は，文字通り，著作権法の体系を概観することを意図して書かれたものと思われる。文体は平易であり，かつ，曖昧なところがなく明快である。文章の贅肉がそぎ落とされている分，読み飛ばすのではなく，一語一語丹念に読む姿勢が必要とされる。また，判例等の引用も他の解説書に比べて抑えられている印象をうける。

これは，文中で繰り返されるように，「時々の最新の技術につねに対応してきたのが著作権法制であり，これほど厳しい宿命を背負った法制度は他にあまり例を見ない。」（本文20頁）という，著者の思想が反映された結果であると思われる。毎年多くの判決が出され，時代の変化に応じて著作権法の改正が続くのであるから，本書を通じて，著作権法のマインドというべきものを理解することが重要である。

初学者にとっては格好の入門書であり，既に著作権法を学んだ者にとっては，知識の整理に適した「概説」である。

（会誌編集部　中村　恵子）